小野小町異譚——『玉造小町子壮衰書』攷——

渡辺秀夫

〈目次〉

はじめに
一　本文について
二　梗概——序と詩との関係
三　『白氏文集』の受容——諷諭と教戒
四　『遊仙窟』の利用——物尽くしと文体
五　願文——表現形式の襲用
六　仏典との関わり——『往生要集』他
むすび

はじめに

『玉造小町子壮衰書』(1)（以下『壮衰書』と略称）は、既に平安末期の藤原清輔『袋草紙』（諸集人名不審、古今集の項）(2)、顕昭『古今集序注』以来、小野小町の形貌を虚実のあわいに揺曳しながら、その受容の過程に於いて、やがて小野小町自身の実像として圧倒的な影響を与えてきた一篇であり、その波及した範囲も広く多彩である。(3) それだけに、本書に関する言及は、古来、作者や成立年代を始めとして数多いが、(4) 本書そのものの具体的な考究はなお不十分である。

小論は、しばらく小野小町との関係を留保し、先行の諸説を批判的に踏まえながら、従来注意されることのなかった諸点を指摘し、一箇の漢文伝作品としての読みを提示し、本書がいかなる文学の位相に成るものか、その作品世界を解明しようと試みるものである。

一　本文について

『壮衰書』を論じるに際し、小稿に必要な範囲に限って、若干、本文について触れておきたい。本書には異本という程のものはないが、小論に引用する本文の校訂に参看した伝本は次の如くである（□は略称）。

[東] 玉造小町子形衰記（尾題。題僉には後筆で〈玉造小町形衰記〉とある）＝東京大学文学部国文学研究室蔵・鎌倉中期写一軸（朽尾武・木村晟・山内潤三編輯『玉造小町壮衰書』〈笠間書院・S56刊〉に写真版影印あり）。本稿の底本とする。

[彰] 玉造小町子状衰書一首（内題、「状」の右傍に「壮」の書入あり。尾題には〈玉造小野小町子壮衰書一巻とある）＝彰考館蔵・宝徳二年（一四五〇）写一冊（原軸装・改装本）。

[慶] 玉造小野子壮衰書一首（内題）＝慶応義塾大学附属図書館蔵・江戸前期写一冊。享徳三年（一四五四）南都東大寺摠持院にて仏子祐成が書写した旨の跋を持つ（『徒然草野槌』、『謡曲拾葉抄』所引卒都婆小町条にいう写本がこれである）。

松　玉造小野小町壮衰書一首＝島原公民館・松平文庫蔵、写一冊（松井簡治旧蔵静嘉堂文庫蔵本〈群書類従本に朱筆にて書入れたもの〉は本書と一致する）。

叡　玉造小町子壮衰書一首并序　空海撰（内題）＝叡山文庫蔵・慶長十一年（一六〇六）写一冊（上掲〈笠間書院版〉に写真版影印を収める。植松正秀「叡山文庫蔵『玉造小町壮衰書』の研究―本文翻刻篇」〈駒沢大・論輯S54・3〉に翻印がある）。

寛　玉造小町子将衰書一首并　空海撰＝寛永二十年（一六四三）刊一冊（寛文三年〈一六六三〉の後刷本がある）。

京　玉造小町壮衰書註＝京都大学文学部図書館蔵・正保四年（一六四七）写一冊（上掲〈笠間書院版〉に写真版影印を収める。なお、本書には、この写しと思われる同館所蔵の『玉造小町抄』写一冊がある）。

群　玉造小町子壮衰書一首并序＝群書類従巻一三六・文筆部所収刊本。

今、試みに、序文中より任意の異文箇所の校異を掲げ、伝本のおよその本文状況を承知しておく。なお、底本は東本とし、便宜に〈笠間書院版〉の通し番号を借りて付した。又群本の掲げる割注等各伝本の異文注記は該本略称に括弧を付す（例―（群）・（彰））。

10誰村往還――松・叡・寛・京・群＝「何」
11～12女答予曰――叡・寛・京欠ク
12良室之女焉　イ――叡・寛・（群）・京＝「娘」　ロ――叡・寛・京欠ク
20衣非蟬翼不被――叡・寛・京・群＝「着」
23兎衾貂裘――松・叡・寛・京・（群）＝「豹」
24染紫蘇而彩麗――叡・寛・京・群＝「色」
30仕子僮僕――叡・寛・群＝「役仕」
33～35紅蠟之燈　挑九枝而満堂上　翠爵之蕪　招百花而餘室中――寛・群イロノ順序転倒
34招百花――彰・慶・松・京・（群）＝「括」
40鵠臘　鴈醢――彰・慶・松・群＝「鴨臘」
50三王五帝之妃――慶・松＝「至今」
50三王――慶・松・叡・寛・京・群＝「皇」
51漢主――（彰）・松・叡・寛・京・群＝「王」
51周公之妻――叡・寛・京・群＝「后」
56是以――叡・寛・京・群＝「依之」
63衣食腹疎――叡・京欠ク
63～64風霜暗隅　門戸既荒　イ――慶・叡・寛・群＝「堕」、京＝「墜」、（彰）・松・（群）＝「隕」　ロ――叡・寛・京・群＝「雨露偸侵」
67尽献――松＝「悉」、叡・寛・京・（群）＝「遍」
67空王之施――叡・寛・京＝「主」
70无益廻人界　イ――慶・松・＝「間」　ロ――叡・寛・京・群＝「間」
70不如帰仏道――彰・（群）＝「依」
75好風容――叡・寛・（群）＝「風」
76然染而――慶・松・叡・寛・京＝「而」
77啓十力――彰・慶・群＝「方」、寛＝「月」
78応願――諸本欠ク
78孤身之――彰・慶＝「云」、松・叡・寛・京欠ク、群＝「云云」
80受楽――彰・慶・松・群＝「愛」、京＝「栄」
81風声――彰・群＝「音」

85爾云――彰・松・群＝「云爾」

確認しうる現存最古写本である東本を基準にすると、これに最も近いのが彰本、次いで慶本、やや離れて松本があり、これら古写本系と、叡本・寛本・京本系とで若干の区別が認められる（特に、叡本と寛版本とは本文・形式共極めて近い）。群本は校訂本で、その奥書に古写の三通と流布の印本とをもって校合した旨を識す。これは、その本文や校異に、右の古写本類と版本の本文と一致する箇所の少なからぬことによって証されるが、他方、これらのいずれとも共通しない異文も認められるので、上掲以外の古写本をも参照したものであろう（群本の底本は不明だが、総体的には寛版本に近いといえる）。

なお、現蔵者不詳で調査しえないが、承久元年（一二一九）書写本があり（昭和三十九年四月『三都古典連合会展観入札目録』第二頁に冒頭部と奥書の写真二葉がある）、現存が確認されれば、これが最古写本となろうか。奥書に「承久元年十二月七日於二遍知院一以二御本一書レ点了。一校了」とあり、さらに「本記云」として「以二駿河中納言雅教之所持之本一令レ校二点之一、成―云々」と識す。これによって、又、駿河中納言雅教所持の『壮衰書』の存在が知られる。藤原雅教（承安三年〈一一七三〉薨・六十一歳）は、後二条師通の孫。井上宗雄『平安後期歌人伝の研究』によれば、雅教の男雅長と、清輔・顕昭の兄弟である重家の男経家とは親交があった由であるから、あるいは、この雅教所持本は六条家と関わりのある伝本として意味あるかも知れない。殊に、『壮衰書』の書名が六条家の清輔『袋草紙』や顕昭『古今集序注』に初見するという点でも興味深いのである。

『壮衰書』には全文に亙って傍訓が施されており、これは承久元年古写本にもみえるから、恐らく本来あったものと考えてよいであろうが、これも諸本によっては出入がある。例えば、90〈霜封幽墓（ホウズイウボノカハネヲ）日曝故墳（シニカバネヲ）屍〉の「霜」を叡・寛・群は「トシ」と訓を付すが、これは下句の「日」を「月」（叡は「目」）と誤り、そのうえで、さらに「霜」に歳年（トシ）の訓を付加したものであろう。原本にどの程度の傍訓が付されていたか確証はないので、小稿では必要に応じて、便宜に東本を参看するにとどめたい。

二　梗概――序と詩の関係

路傍に憔悴し痩せ衰え、飢餓と極貧に窮した一人の老女がさすらう。これを睹（み）た〈予〉は、その老婆に出自や係累を尋ねてみると、次のように答えた。――『私は、もと〈倡家の子〉〈良室の娘〉、若かりし頃の容貌は美しく、衣裳は華麗、調度、殿舎、飲食はすべて奢侈を極め、数々の遊宴は風流の限りを尽くし、〈君臣の子孫〉〈富貴の主客〉からの求婚はひきもきらなかった。そうした贅をこらした歓楽の日々を過すうち、やがて父母兄弟のよるべを失い、ようやく家産は傾き、孤貧淪落の憂き身とはなった。今は、贅美の無徳、今生の無益を悟って、仏道への帰依を願うばかり……』――と。この言を聞いて〈予〉は、その壮衰の境涯に無常を観じ、白楽天の「粟中吟」にまねて、ここに詩を賦そうと思う（以上、序）。

路頭に彷徨する零落した老婆は、父母に死別し悲しみに暮れ、仏門に帰依しようとする素志を抱いている（ほぼ序の内容・語句を踏む。以下、やや内容を展開し）、孤愁のやもめ暮しに沈むうち、一人の猟師に嫁し、可愛い男児を産む。が、壮時の栄楽の日々を回想しながら現今の悲惨な日常を顧ると、殺生を業として四足を食する

生活に限りない我身の罪障の深さを嘆じ、遂に発心して、痛切に浄土への求済を願うに至る。（後半部は、もっぱら往生楽土の様子――阿弥陀浄土の観想――を叙べ）、仏法を讃えて池上に乱舞する鳥禽、妙なる楽器の調べ、豪壮な宮殿、仏の三十二相好等々を克明に列挙、荘厳し、末部に西方安楽国への引接を確信し、最後に〈讃仏乗〉のために本詩を賦した旨を記す（以上、詩）。

序と詩を内容的な関係でみると、詩は序の単なる繰り返しではないので、序の主人公と詩の主人公を全くの別人とみる向きもあるが、[5]それは誤解である。詩が序を踏まえていることは辞句上にも明白で、詩はそれを前提として、さらに主題を明確にすべく内容を敷衍させた形になっていて、相互に矛盾する訳ではない。詩は、序で十二分に描き尽くした過去の栄楽を折々に点綴しながら、そうした驕慢の果ての零落のさまを大幅に増加し、序では不十分であった悲惨な生活を描いて現身の罪果の度し難さを強調し（主人公を殺生を事とする猟師の妻とするのも、そうした観点からの脚色である）、それと対照した、仏に囲繞され至福に満ちた安楽国土、阿弥陀の楽園の華麗な目出度さを筆を極めて讃嘆し、そのような浄土への引接、弘済を語ったものである。

つまり、序が、現世の過去・現在に於ける栄華と衰亡を語っているのに対し、詩は、それを承けて――まさしく序分として踏まえつつ――さらに、今生と来世に於ける困苦と喜悦とを対比して構想したものである。序に於ける今生の過去の栄楽・贅美のことこまかな形象は、詩に於ける当来世の浄土のそれと間然なく照応し、前者の不全・無常と後者の永遠なる充足とが観念的に提示されている訳で、序と詩は緊密な構成をもった不可分のものとなっている。ただ、後述の如く、序が、多分に『遊仙窟』や『白氏文集』等の辞句を利用した隔句対の結構による文辞のあやへの遊戯に傾斜していることを考慮すれば、詩こそが、より本書の主題を明確に表現しているといえよう。

三　『白氏文集』の受容――諷諭と教戒

本書と『白氏文集』[6]との関係は、その序末に83～84〈因レ效且学二楽天棄中吟之詩一、且効二幸地魯上詠之賦一、韻造二古調一、詩賦二新章一爾云〉と銘記していることに明らかであるが、『壮衰書』が「棄中吟十首」（文集巻二一・0075～0084）に倣ったというのは、十首の詩句を用いたのでなく、そこに提示された題材とテーマ（諷諭）を学んだということである。「棄中吟十首」の題材と主張の数例を挙げれば、富家出身の嫁の非を警告し（諫婚）、[7]贅を尽くした大邸宅造営の無意味を嘆き（傷宅）、立身出世後の交情の軽薄、人世の浮薄、無常を訴え（傷友）、あるいは、民の飢餓を見ては高官の奢侈を非難する（軽肥）など、ここに窺える諷諭詩の内容、批評精神は、『壮衰書』の主張と重なり合う部分が大きい。そして、殊に、白氏みずから「十首棄吟近二正声一」（編二集拙詩一成二一十五巻一因題二巻末一戯贈二元九李二十一。文集巻十六・1006）と云い、又、諷諭詩の中でも、愛読された新楽府に比して文辞の唯美性が薄く、道義的要素に勝り、旧鈔本の伝来も少ないと指摘される「棄中吟」[8]が、本書の規範に据えられているということは、白氏諷諭詩受容の問題としても興味深い。それも、白氏の諷諭詩の名と精神に借りて驕慢を戒め浄土への救済を勧進する仏教的教戒を試みようとする明確な意図によるのであろう。

ところで、右の諷諭詩と関わりつつ、『壮衰書』の依拠した最も

近い話型の規模として挙げるべき一篇は、紀長谷雄（八四五～九一三）『貧女吟』（本朝文粋巻一）である。本書は、貧窮老病に困苦する孤独の老婆の紹介に始まり、その往時の富裕な生活の回想を展開し――もとは富家の深窓の麗人、父母は貴人との婚儀を望み、貴公子の求婚も多かった（本是富家鐘愛女、幽深窓裏養成レ身。……年初十五顔如レ玉、父母常言与二貴人一。公子王孫競相挑、月前花下通二慇懃一）が、仲人口に謀られ、遊蕩児に嫁した結果、家産尽き、父母兄弟に死別して（産業漸傾遊猟裏、家資徒竭醉歌前。十余年来父母亡、弟兄離散去二他郷一）、やがて困窮の境涯に淪落する（日往月来家計尽、飢寒空送幾風霜、秋風暮雨断レ腸晨、憶レ古懐レ今涙湿レ巾）――、末尾に、この老女を見聞した作者（長谷雄）の、世間の豪貴な家の娘や、子女を持つ父母への、鞍選びの心構えと忠告を記して結びとする（寄レ語世間豪貴女、択レ夫看レ意莫レ見レ人。又寄世間女父母、願以二此言一書二諸紳一）。ここに、『貧女吟』と『壮衰書』の梗概の共通性は既に明らかであろうし、具体的な行文の類似についても、これを証することができる（その一端を注9に対照する）。

『貧女吟』一篇は、女主人公の境涯を「琵琶引并序」（文集巻十二・0602・0603）や「大行路」（同巻三・0134）に、又、その安易な婚嫁を戒しめる諷諭啓蒙の意図を「井底引二銀瓶一」（同巻四・0164）に倣った、一種の白詩の翻案的作品であることが、既に大曾根章介「貧女吟雑考」[10]に詳しい。『壮衰書』の主人公の往時の回想に、みずからを12〈吾是倡家之子、良室之女焉〉と紹介するのは――〈倡家の子〉＝あそびめと〈良室の女〉という相反する形容辞を共在させる奇矯な表現は、――「貧女吟」の「本是富家鐘愛女」と、『貧女吟』が踏まえた「琵琶引并序」の「本長安倡女」を二つながらに引用する修辞（遊び）によるのであり、又、『壮衰書』の詩で、老残の寡婦（主人公）が落ちぶれて猟師の後妻となるのも、「琵琶引序」の「年長色衰、委レ身為二賈人婦一」とある趣向に拠っているのであろう。このようにみると、『壮衰書』は、白氏諷諭詩を正統に受容する『貧女吟』を話型として象どり、さらにその諷諭の詩精神を継承展開させたものということができよう。なお、ここに本書の構想上の出拠が十世紀前後期文人の手に成る倭詩に求められる点に、『壮衰書』という作品の、かなり通俗的な文学的位相が考定される筈であることにも留意しておきたい。

以上、本書が白氏の諷諭詩の方法を学んでいることをみてきた訳だが、この点を、さらに『壮衰書』本文について検討してみよう。『壮衰書』の辞句が白氏諷諭詩を材源とする例は、次の如くである。

3骨竦筋挩――→骨竦筋高脂肉少
（巻四・0150・八駿図（戒奇物惑伏遊也））
〈注〉竦――東・（承久元年本）＝「練」・（「練」）に作るが、諸本により改む。

6左臂懸二破筐一、右手提二壊笠一――→復有二貧婦人一、抱レ子在二其傍一。右手秉二遺穂一、左臂懸弊筐（巻一・0006・観レ刈レ麥詩（野老歎）（駅））

17～18腕肥玉釧狭、膚寄錦服窄――→緑蠟富将金釵多、皓腕肥来銀釧窄（巻四・0162・塩商婦（愍幸人））

29気香薫馥之貞、不レ異二蘭麝散風之句一――→照レ地初開二錦繡段一、当レ風不レ結二蘭麝褒一（巻四・0152・牡丹芳（奥天子之愛賞也））

これらは、白詩の断句による修辞ではあるが、例えば、「塩商婦」は、賤民の身から豪商に嫁し、奴僕婢女を従え、人民の搾取のうえに驕奢を誇る女人を諷戒の意をこめて写したものであるが、この詩の辞句を踏む『壮衰書』の行文に、そうした白詩の原意を背景に点

綴する趣向をみてよいとすれば、本書の白氏諷諭詩引用のあり方を窺わせて興味深い。

さらに、壮麗豪華を誇る玉造小町の邸宅崩壊のさまを叙す条の、

62～66奴婢不レ従、僮僕无レ仕。富貴漸微、衣食屢疎。家屋自壊、風霜暗隙。門戸既荒、草木悉塞。荊棘繁二其内一、狐狸棲二其裏一。蝙蝠棲レ簷、蟋蟀居レ壁。燈燼滅レ光、雷電発レ声。福根已死、禍業自生

の部分は、その想意の材源を、

長安多二大宅一、列在二街西東一。往往朱門内、房廊相対空。
梟鳴二松桂枝一、狐蔵二蘭菊叢一。蒼苔黄葉地、日暮多二旋風一。
前主為二将相一、得レ罪竄二巴庸一。後主為二公卿一、寝レ疾歿二其中一。
連延四五主、殃禍継相鐘。自二従十年一来、不レ利二主人翁一。
風雨壊二簷隙一、蛇鼠穿二牆墉一。

（文集巻一・0004・凶宅詩）

白詩「凶宅詩」――かつての将相・公卿という高貴な家主も、うちつづく災禍に悩れ、今は住む者もなく梟、狐の巣となり風雨蛇鼠に破られ、荒れるにまかせた邸宅を叙す――を下敷にし、これを「蟋蟀居レ壁」（礼記・月令）等の周知の語句で飾ったものであろう。[11] なお、「凶宅詩」の如きモチーフは白詩に類例が少くないが（桑中吟中の「傷宅」、新楽府の「杏為レ梁」）、あるいは、「和二夢遊春詩一一百韻并序」（巻十四・0804）中の、詩友元稹の境涯を詠じた部分（岳父も妻女も死んだのち、栄花は去って贅沢な暮しも終わり、かつての歌舞の堂には蜘蛛が巣喰い、蝙蝠が棲み、数多の婢僕も今は居ない＝「舞榭綴二蟻蛸一、歌梁聚二蝙蝠一、嫁分紅粉妾、売散苴頭僕」）をも参照しているであろう。

『壮衰書』の百三十韻に亙る長詩（序には百二十四韻とある。又、京本は末尾にさらに七言二句〈常低二如来慈悲鈎一、願食二汲引救済餌一〉を加える）が、平安中期以後の七言詩盛行の中で、例外的に五言の古調詩の形式を採ることも、「桑中吟」に倣うものとみてよい。白氏諷諭詩の平安朝に於ける受容態度については、なお明確を欠き、あるいは享受場に於ける位相的差違をもみるべきかとされるが、[12] 文集享受に於いて、巻十三以降の律詩に比して諷諭詩の受容が著しく少ないという大勢に鑑みて、[13] さらに、本書の如き極めて倭習の強い、俗なる性格を考慮したとき、『壮衰書』の諷諭詩利用のあり方は、やはり注目されてよいであろう。

四　『遊仙窟』の利用――物尽くしと文体

『壮衰書』の序に『遊仙窟』の利用が著しいことは既に注目されてきており、例えば、林道春『徒然草野槌』（下之二・元和七年1621成）に「玉造の書を見るに遊仙窟に似たる所もあり」と指摘があり、『玉造小町壮衰書注』（＝玉造小町抄＝京本）、大田南畝写本頭注（安永七年1778写、国会図書館蔵本、本文は寛文三年刊本）に具体的検索がなされていた。その箇所は、とりわけて、宮殿内の貴重な調度、贅を凝らした料理（魚鳥獣果）の品名を列挙した部分に集中して用いられている。それらは、京本注や〈笠間書院版〉補注篇によって殆んど指摘し尽くされているので、ここでは繰り返さない。が、重要なのは、単なる出拠の検索でなく、それらがどのように応用されているかにあると思われるので、以下にやや煩雑になるが、この点について食物尽くしの箇条に関してみてゆこう。

・を付したものは『遊仙窟』[14]にみえるもの。□で囲んだものは『類聚雑要抄』巻一（群書類従巻364）、『厨事類記』（同巻470）

にみえる平安末来の公卿の宴会の献立に供されるもの、いわば貴族社会の御馳走といったところ。

37〜43鱠非頼鯉之腴不啻、鮨非紅鱸之鰓未味。鼈鮒之魚、翠鱠之炙。蒲鰯之齏、蛙鯉之膓。膜沸東河之鮎、臓煑北海之鯛。鮭條鱠楚。鯉腊鮪臑。鶉臓鴨膝。鴈醢鳳脯。雉臘鵞膝。熊掌兎脾。醍醐龍腦。煮鮑煎蚌。焼蛸焦蠟。蜃螯螺臍。

亀尾鶴頭。備於銀盤調於金机、饌於鈿盞膳於鏤皇。

43〜50集神嶺之美果、聚霊澤之味菜。東門五色之瓜、西窓七班之茄。燉煌八子之榛、横煥五孫之李。大谷張公之梨、広陵曾王之杏。東王父之仙桂、西王母之神桃。魏南牛乳之椒、趙北鶏心之棗。泰山花岳之乾柿、勝丘玉阜之餙栗。嶺南丹橘、渓北青柚。河東菜菱、江南翠芘。万号千名、珍味美香矣。

品名羅列の文学は、山川草木虫魚鳥獣宮殿等の多彩珍奇な景観を修辞の限りを尽くして展開する漢代の辞賦以来、〈列挙の文学〉としての賦に特徴的なもの[16]で、例えば、宋玉「招魂」（文選巻三十三・騒）には宮殿建築の美やあらゆる御馳走の目もあやな類聚があり、班固「両都賦」（同巻一）には鳥の、張衡「西京賦」（同）には宮殿のそれぞれの羅列的な描写がある。『壮衰書』も、はるかにそのような〈正統〉の遺影を承けるものではあろうが――なお、高級料理の品名〈珍味一覧〉の形式に限っていえば、唐・段成式撰『西陽雑俎』巻七（平凡社東洋文庫版No.256）等も参照されよう――、しかし、直接的には『遊仙窟』を倣うものとすべきである。ただし、そこで注意すべきは、□で示したように、贅沢な料理の品名列挙には、珍奇を衒う修辞の陰に、案外に、平安貴族達にとっての御馳走、珍味の数々が掲げられているということである。〈鼈鮒之魚〉（黄色い鮒のつつみやき）は、やや後の例だが、「包焼ノ事。鮒ノ五六寸許ナルヲ能鱗ヲフイテ、腹ヲ明能洗テ。扨結昆布。串柿。クルミ。ケシ。此四色ノ外ニ粟ヲ蒸メ可ㇾ入」（四条流庖丁書・群書類従巻365）とみえる。『遊仙窟』の行文を大いに利用しながらも、なお、当時の珍味と考えられた実際の御馳走一覧を踏まえて、その羅列の案文が構えられている訳である。

我国に於ける類聚形式の文学の淵源と変遷については林和比古『枕草子の研究』に素描されているので、ここでは述べない[17]が、ここに、平安末以来盛行する〈往来物〉との関連をみることができる。本書の土俗的な物尽くしの思想的基盤、往来物的な土壌の背景を予測しうるのである。しかし、と同時に、本書の物尽くしを仮りにその典型としての『新猿楽記』や『庭訓往来』の如き一書と較べるならば、『壮衰書』の物尽くしは、より表現的であり、文字による遊戯性、対属（対句）への興味を主体とする――より漢文学の様式に価値をおく――点をも注意すべきである。

（鼈鮒之魚　翠鱠之炙）
（蒲鰯之齏　蛙鯉之膓）

と、〈鼈―翠・魚―炙〉・〈蒲―蛙・齏―膓〉とそろえ、

（煮鮑　焼蛸）
（煎蚌　焦蠟）

「蠟」の字義はワラジムシで、ここに合わないが、これは「イルコ東・イリコ麼松と訓む如く、又京本注にあるように、「熬海鼠」（和名抄巻19・＝伊里古）であろうが、すべて四つの品名を虫偏でそろえた文字のあやであろう。

〈東門五色之瓜、西窓七班之茄〉は、『遊仙窟』の「青門」を〈東門〉と変え（五行で同通）、「東」以下の対で〈西〉以下を案出する――和名抄（巻17）に「斑瓜」（未多良宇利・黄斑文瓜也）が「青瓜」と並んで載るのは関係あるか――。『遊仙窟』の「燉煌八子之柰」に倣って、同じく火偏で同義の〈燉煥〉を置き、以下〈五孫〉を対にそろえる。又、『遊仙窟』の「大谷張公之梨」に真似て対を構え――「同対者、若大谷・広陵……其類是同、故謂之同対」（文鏡秘府論・東巻・論対）――〈広陵曾王之李〉と作った訳である。又、二つ共に『遊仙窟』を引く〈東王父之仙桂、西王母之神桃〉も、律儀に対に整序して、もとの「東王公」をその別名である〈東王父〉（「木公、亦云東王父」、亦云東王公」＝太平広記巻一引仙伝拾遺）におきかえる。[18] このようにみれば、〈西窓七班之茄〉〈燉煥五孫之李〉等がなんであるかを検索することは（京本注は、丁寧にそのいちいちについて、「このことまだかんがへしらず」と出典未詳を記す）、かえって無意味であり、対属（対句・対偶）を娯しむ辞句の表現のレベルで軽く受けとるべき性質のものと了解できよう。そうして、実は、こういう作文上の措辞の遊びこそが、本書の文体上の特色なのであって、この対属趣味は、本来の正格な駢儷文の作法[19]からは遥かにずれた、対句美を偏頗に追求志向する我国の作文法（例えば「作文大体」の対の詳細な分類指南を参照）のゆき方の、さらにもう一つの展開相に位置づけられよう。これは、序も詩も共通の性格であり、従って、序の末尾の〈因レ玆、且学二楽天秦中吟之詩一、且効二幸地尋上詠之賦一〉の下句は、対のあやによって、仮作されたにすぎないから、この賦を現実に求めることも無意味である。こういう本書の俗な文章作法のあり方は、先の往来物的な物尽くしの文体の反映とあわせて、この作品の成立年代（決して平安中期以前には遡りえない）とその文学質をよく示すであろう。

なお、各種の魚の字義には日中両国で異なるものがあり、それで、本書にみえる「鮭・鮎・鱒」等も、中国の『本草綱目』等に拠ってそれぞれ「フグ・ナマズ・カジキ」等と注する解があるが、[20] いかがであろうか。本書の「鱒腊鮪臘」の案出には、あるいは「施罛瀫瀫、鱒鮪発発」（毛詩・衛風・硯人）、「警二水府一兮、鱒鮪奔走」（文集巻二十一・1419・黒龍飲渭賦）などが下敷にあるやも知れないが、新撰字鏡や和名抄に徴して国語に理解してよいであろう。「東河之鮎」などは、きっと鴨河のアユを想起したはずである。

ところで、このような物尽くしの部分に於ける難字の羅列をも含めた文字の遊びは、本書の読み物＝書き物としての側面を窺わせている。後世、[叡]本や[寛]版本の如き唱導形式に写しとられて享受されてきた歴史的経過を論拠とし、さらには、序59～60〈而間、十七歳而喪二悲母一、十九歳而殞二慈父一、廿一而亡レ兄、廿三而死レ弟〉の箇所に「女人百歳篇」（敦煌綴瑣所収）にみえる如き定格聯唱形式[21]の民間口承文芸と同質の本性を穿つ解もあるが[22]如何。確かに詩中にも93～95、〈寡孤送レ年処、嫁得一狐師。狐師有二一婦一、孤妾無二一婢一。二妻互咒咀、一身自愛悲。愛悲過レ日程、産得一男児。男児容顔美、妾身形体衰〉のように、いわゆるしりとり式の技巧（蟬聯体）の如き民間歌謡に発する表現技法もみられるが、こうした表現技巧は、既に熟知の六朝詩群や白氏文集にもよくみられるものであって、[23] これらをもって直截に口唱世界と結びつけるのは早計である。次項に述べるように、本書が唱導的世界に近い雰囲気の中で創作されたことを認めつつも、なお、書き手の漢文学的地盤――多分に倭様化されてはいるが――を無視してもならないであろう。

五　願文――表現形式の襲用

『壮衰書』は『貧女吟』を話型としていることを上にみたが、『壮衰書』には仏教的色彩が著しく、主題が浄土思想による教戒性にある点で『貧女吟』とは異なっていた。

華麗豪壮な盛事とその衰亡の様を対比的に構成し、盛事にひそむ無常感を主題とする文学形式は、例えば、初唐の歌行体詩、劉希夷「代悲白頭翁」、盧照鄰「長安古意」、駱賓王「帝京篇」「疇昔篇」等に共通の基調として、[24] 自然の悠久と人事のはかなさとを対比する中国文学一般のテーマに倣って、広く漢詩にみられるものであるが、『壮衰書』に関しては、例えば、「少時意盛壮、為レ老所レ見レ逼、形衰極二枯槁一、気竭憑レ杖行」（出曜経巻二無常品第一ノ二・大正蔵四ノ619頁下）や、「世有二四事一、不レ可レ得レ久、何謂為レ四、一者有常必無常、二者富貴必貧賤、三者合会必別離、四者強健必当レ死」（法句比喩経巻一無常品第一、大正蔵四ノ576頁中）の如き、仏教的な無常思想の文脈で考察されるべきである。そして、本書が我国の漢詩（倭詩）にその話型の範を直接採ったことを考慮すれば、同様の見地から右のような仏教的色彩をもつ表現形式を考定する必要があろう。

壮麗な対句仕立ての駢文調にのせて仏教的観点から人の世の壮衰栄枯を詠嘆し、浄土への希求を主題とする文学形式として、ここで参照されるべきものは、願文である。『壮衰書』は願文の形式・表現を模して製作されたと考えられるのであり、この様式に比定することによって初めてその文学質がよく理解されるのである。以下、この面からの検討を試みる。

願文の形式については、鎌倉期の作文指導書『王沢不竭鈔』[25] に拠るのが便宜であろう。

それに従えば、一番「四種之次第」として「世間無常通用儀」「孝行儀」「仏法讃歎」「悲歎哀傷」、二番「聖霊平生存生之様」、三番「病中之様」、四番「逝去之様」、五番「悲歎事」、六番「日数事」、七番「修善傍経事」、八番「時節景気事」、九番「昔因縁事」、十番「廻向句事」とあり、これらを一応の目安として長短増減をあんばいし、場合に応じて順序も適宜変えて作るのがよいという（これら十番は必要条件ではなく、構成の順序も絶対ではないのである）。そこで、これを一つの標準として『壮衰書』と対照してみよう（なお、三・四・六番に相当するものが本書にみえないことは、おのずから明らかであろう。又、以下は、出典の指摘でなく、依拠した形式、表現の類同性の検証が目的であることをことわっておきたい）。

二番「聖霊平生存生之様」とは、死没（出家）以前の豪奢な暮しぶりを指し、『不竭鈔』は「花下之春遊、揮二神筆一而手書二御製一。月前之秋宴、吹二玉笛一而自操二雅音一」（一条院四十九日御願文・大江匡衡・本朝文粋巻十四所収）を例示する。これは、『壮衰書』の53～54〈待二花時一、乗二玉筆一詠二紅桜紫藤之和歌一。迎二月夜一、操二金絃一調二鶴琴龍笛之妙曲一〉に近い。又、「熙心春浅、未レ及二二八之齢一。蘭質秋深、初備二三千之列一」（為二左大臣息女女御四十九日一願文、大江朝綱・本朝文粋巻十四所収）は、13～14〈齢未レ及二二八之員一、名殆兼二三千之列一〉に似る。

116～117〈去不レ来壮齢、来無レ去衰姫。月光減二耀輝一、霜色増二寒威一。残日闌猶少、余年縮復幾〉は、一番「世間無常儀」に相当しようが、これに類する願文の例としては、「月冷霜寒、猶長二眄（鈴カ）々之秋夜一。時移事去、徒送二冉々之年光一」（奉二為故博陸殿室家一被レ供二養自

筆法花経願文・平泉澄校勘『(六歳寺本)江都督納言願文集』巻五所収)や、「如レ幻如レ夢、長夜本不レ遠、老也病也、残日亦幾、何涙先レ言落」(法華経三千部転読・同巻六所収)等を挙げうる。

又、八番「時節景気事」＝「秋　訪二去跡於虚無一、芝砌之露漫々。趣二遺音於故宮一、蘭庭之風殺々」「故宮寄レ眼、月光殊二昔秋之色一。荒砌尋レ声、虫響非二前年之聞一」(『不蝎鈔』引例)は、113～115〈荒家棲二蝙蝠一、破屋居二孤狸一。蟋蟀喧懸レ壁、蜩蟬鳴処鬨…荊棘難二剗掃一、莪蒿未二刈夷一。故閑悲風起、踈窓泣露昼〉に近い。

さらに、五番「悲歎之事」乃至八番に相当する「従二彼棘路雲惨松墳風悲一以降。寒来暑往、未レ忘者懐レ旧之涙。日居月諸、難レ尽者罔レ極之誠」(故通家室為二養父大納言一修善・同上願文集巻五所収)は、89～91〈恨哉離二父母一、涼煥数推移。哀矣別二耶孃一、歳年多改之。霜封幽墓骸、日曝故墳屍。松老風颯颯、萊生雪皚皚〉と類想的である。そうして、詩末部の149〈白棺閉レ神暮、青蓮開レ眼期〉なども、「便是綺窓瞑目之時、寧非二蓮台結跏之日一」(為二二品長公主四十九日一御願文・保胤・本朝文粋巻十四所収)の如き、十番「廻向」にあたるものみることができる。

あるいはまた、さらに願文一般の表現形式についてみれば、88〈鶴髪如二霜蓬一、鮐背似二凍梨一〉[26]も――これらは類書の〈老〉の項に掲出される類型的な語だが――、「弟子江裙錦袖之昔、日月徒過。霜蓬凍梨之今、旦暮争知。是以、剃二鬒髪一而為レ尼、毀二形容一而擯レ俗」(大炊殿為レ尼願文・同上願文集巻五所収)や、「未レ及二鮐背之齢一、未レ至二凍梨之姿一」(入道民部卿親範母儀逆修・言泉集・老女出家＝『安居院唱導集上巻』所収)に、老女の出家を叙す形容に慣用されるものであることに注意したい。

同様に、72～76〈是以、削二霜鬒愁遺一、長欲レ厭二六塵之棲一。剃二雪髪之纔残一、忽応レ帰二三宝之境一。鸞鏡翫レ掌之日、青黛画レ眉而好二風容一。鵝珠戴レ頭之時、白毫遍レ身而備二月貌一。須二作レ尼以帰レ仏、従レ僧以聴レ法〉という、出家以前の壮時と対照しつつ発心の契機や意志を叙べる文章も、「忽落二雙花之傍一、早入二一実之道一。以来、抛二鸞鏡一、多年容儀営永止。奏二鵝衆一、幾日妓炉煙久絶。閑居多レ暇、所レ積者唯転経念仏之功。安適無レ営、所レ企者専供花焼香之善也」(同上言泉集)、「是以、発レ心落二雲鬢一、受レ戒戴二月光一。脱二花衣一、着二薛服一、抜二金剣一、携二木刃一。」(坊門殿逆修、同上言泉集所収)、さらには、「昭君村之辺、春柳黛変。貞女峡之中、暁浪声老。以降、忽落二蟬鬢一而欠二蟬翼一、久忍二鵝珠一而帰鵝□。蒼々秋月之入レ窓之夜、只修二観念一於三昧一。凛々白霜之点レ叢之朝、偏懺二罪障一於六根一」(常陸母堂願文・筆海要津下、続々群書類従16所収)などが参考されようか。

このようにみてくると、対句の巧を凝らし文辞の華麗にのせた和習味の強い『壮衰書』の結構とその表現の位相は、女人の出家・追善供養のための願文――平安中期以降、さらに鎌倉期に至って唱導のテキストの範例に掲げられるような一類――のそれに比定することができようかと思う。こうした願文の形式と表現を媒介することによって、平安期漢文伝作品の中でも特異な本書の性格をよく捉えうるように思うのである。

『壮衰書』を願文という観点で読んだ研究史は、管見にみえないが、なお付言すれば、本書の序の麥壮な邸宅荒廃の様子を叙した部分で、□・□・□・□が有する句(古鈔本に欠く、つまり後世の増補にかかる)63～64〈家屋自壊、風霜暗隕。雨露偸侵、門戸既荒、草木悉塞〉――この辺も、風霜(歳年)によって家宅が損傷される無常(「夫霜雪雨露、殺二生万物一者也」〈韓詩外伝〉)を表現する願文中の文辞、例えば「爰、年代玄遠、風嵐侵二彼棟宇一。日月推移、

雨露漏二其壇場一」（為房朝臣甘露寺修善・同上願文集巻六所収）の類型に倣うか――が、『菅家文草』（巻十・願文上）の「於是、星霜暗積、霧露数侵」（638・為二大枝豊岑真岑等一先妣周忌法会願文 貞観六年八月十五日）による脚色であるとすれば、その享受史に於いて本書を願文の位相で理解した事例のひとつになろうか。

六　仏典との関わり――『往生要集』他

本書が仏教思想との関連の中で創作されたことは、既にその著作動機に明示されるところで、その一端は上述したが、翻って、それは、玉造小町なる女主人公の形貌の造形の中に端的に表象されていることにも注意しておくべきであった。

作品の冒頭部・序の初めに紹介される路傍の老婆の姿3～6〈容貌顧額、身体疲瘦。頭如二霜蓬一、膚似二凍梨一。骨竦筋抗、面黒歯黄。裸形無レ衣、徒跣無レ履。（略）糠粃悉畢、旦暮之命不レ知。〉という形容は――ここも又、漢文系の醜人の類型をも踏むが(27)――、「彼諸餓鬼、裸形無レ衣、被髪自纏、黒瘦羸瘠、唯皮裹骨肉血都無、身体麁渋猶如二枯樹一、恒苦二飢渇一、思二念食飲一、常不レ能レ得」（大方等大集経巻三十九、日蔵分悪業集品第五・大正蔵一三ノ262頁中）、「於二嶮難処一、東西馳走、為レ火所レ焼、頭髪蓬乱、身毛甚長、身体羸瘦、脈如羅網、脂肉消尽、皮骨相裹、其身長大、堅勁麁陋、爪甲長利、悪業所レ誑、皺面深眼、涙流若レ雨、身色黧黮、猶如二黒雲一」（正法念処経巻十六、餓鬼品巻四ノ一・大正蔵一七ノ94頁中）を引例すれば明らかな如く、餓鬼のそれに倣うものである。

つまり、玉造小町の極貧の醜悪な生態は、「醜陋者従二瞋恚中一来為レ人、貧窮者従二慳貪中一来為レ人、……下賤者従二憍慢中一来為レ人」（仏説善悪因果経・大正蔵五八ノ1380頁下）式の考えに沿って、過去の罪業の果報（本書では現報）として餓鬼に転生した如くに描き出され、そうした教戒を示す趣向として構えられている、という訳である。ここに『法苑珠林』（巻五十六・貧賤篇第六十四・引証部第二）に掲げられる「如二瓔指経云一、当レ知貧窮比二於地獄一、失レ所二依憑一、栖寄無レ処、憂心火熾、愁痒燋然、華色既衰、容転障礙、身体尫羸、飢渇消削、眼目陷陥、諸節骨立、薄皮纏裹、筋脈露現、頭髪蓬乱、手足鋭細、其色艾白、挙体皴裂、又無二衣裳一、至二糞穢中一」（大正蔵五三ノ713頁中）を示せば、この点はより納得し易いであろう。又、この玉造小町を形象化したとおぼしい「陽明文庫蔵小野小町像」（片桐洋一『小野小町追跡』57頁参照）の画像を、例えば『餓鬼草紙』のそれと対照すれば、この間の事情はさらに明らかであろう。

ところで、本書の出典関係については、次のような点にも留意しておくべきかと思う。

詩中の、123〈秋夜深綿々、春日永遅々〉の句に関し、周知の『毛詩』（豳風・七月）の「春日遅遅、采蘩祁祁」を挙げることは容易だが、原拠としてはともかく、果して、それだけで、どれほど本書の表現（文体的意味）を注解したことになるだろうか。まず、上句「秋夜綿々」と一対形式の趣向としては、「上陽白髪人」（文集巻三・0131）の「秋夜長、夜長無レ睡天不レ明。耿々残燈背レ壁影、蕭々暗雨打レ窓声。春日遅、日遅独坐天難レ暮」を引くべきだろう。しかし又、白詩では独身の女の艶歌風の怨みとして秋の夜長、春の長日の無聊、耐え難さを描いている点は本書と異なる。本書の詩中の文脈は、121～124〈君前而我後、子傷亦夫猗。父母喪不レ拠、夫兄殞无レ依。不レ当二眼前福一、可レ専二身後褪一。唯応レ獣二有漏一、亦欲レ願二无為一。秋夜

深綿々、春日永遅々。捫レ涙臥慘例、断レ腸起嘔咿。片時袂難レ乾、長夜枕易レ敧。愁気余二心府一、憤神満二胸陂一。永牽二往生餞一、忽致二発心餐一〉の如く、仏教的観点から無常なる今生に於ける陸続たる困苦の尽き難さを語るものとして、それは意味づけられている。白詩の該句が、やや仏教的な場に援用された例は、『三宝絵詞』総序であるが、ここもなお、多分に出家した若き内親王の夢多きつれづれ――ややもすれば碁や琴や物語の魅惑に耽けりがちな――の感が強い。ここで『壮衰書』の例に参考となるのは、やや後の例だが、伝覚鍐撰『父母孝養集』巻上にみえる、八苦の説明文中の第三病苦の叙述中に「若来見れ共、我身の苦やすまる事なし。遅遅たる春の日暮し難く、漫漫たる秋の夜明しがたし、是に付ても地獄の苦を思遣て往生のいとなみをせざる人は後世もたのみなし」（興教大師全集）とある用例である。恐らくは、『壮衰書』の表現も、これと同通する場の中で書かれ、享受されたものと考えられよう。本書の如き作品は、単に中国詩文に直接的な出典を求めても、すでに絶対的に有効ではない。重層した自土の嗜好に培養されて倭風に変成した、我国の漢文系作品（より広義の）の表現位相の中で理解されなければならない性格のものであることに改めて注意しておきたい。この種の漢文伝を読むとは、そういうことでなければならないと思うのである。

さて、詩に、90～91〈霜封幽墓骸、日曝故墳屍。松老風颯颯、萊生雪皚皚〉とある句について、例えば、「代悲白頭翁」の「已見松柏摧為レ薪、更聞桑田変為レ海」などを踏んで書いたかと推定する理解もあるが、類想としてはともかく、ここの出典としては、『大般若婆羅密多経』巻四八九「往至二塚間一、観二所レ棄屍一、骸骨狼籍、風吹日曝、雨濯霜封、積有二歳年一、色如二珂雪一、見二是事一、已自念二我身一、有二如レ是 性一具二是法一、未レ得二涅槃終帰一、如レ是深生二厭離一」（大正蔵七ノ486頁下）を下敷きにすると考えるべきであろう――なお、松は墳上に植える樹[28]――。そして、この場合も、『大般若経』の当該条を引いて止むのでなく、さらにこれが、源信『往生要集』（巻上・不浄）に「況復命終之後、捐二捨塚間一、経二一二日乃至七日一、其身膨脹、色変青瘀……乃至成二白骨一已、支節分散、手足髑髏、各在二異処一、風吹日曝、雨濯霜封、積有二歳年一、色相変異[29]、遂腐朽砕末、与二塵土一相和」〈已上、究竟不浄、見二大般若止観等一〉（日本思想大系6・332頁）とみえることも注記すべきであろう。

『壮衰書』に浄土思想の影響が著しいことは既に言表されてきた。特に詩の後半には、浄土三部経（殊に『観無量寿経』）による修飾が顕著で、京本注はこの点を詳しく指摘する。詩の後半部分の、長々と極楽浄土を観想する箇条＝㈠浄土の池及びそこに飛翔する鳥類131～133、㈡浄土の妙なる音楽136～138、㈢浄土に聳える宮殿楼閣141～142、㈣仏の相好（弥陀の三十二相）[30]143～145等が、それらである。浄土教は上代以来移入されて久しく、又、この種のかなり一般的な経文の場合、直接その経典に就くことも容易である一方、より通俗的な引用も可能であろう。しかし、上来の検討から推考される『壮衰書』の性格や成立年代からみれば、その撰述直後からの『往生要集』の貴族社会への広範な浸透に鑑みて[31]、本書も『要集』を媒介に、これらの行文を練っていると考えるのが自然であろう。「極楽和歌序」（彰考館蔵『本朝小叙(序)集』所収、〈藤原明衡作カトスル〉）の極楽浄土の描写は、『壮衰書』のそれと同工であって、その末尾に「蓋楞厳院往生集銘レ心染レ肝、且拠二彼文段章句次第一詠レ之而已」とみえ、『要集』の利用が明らかであることも参考されようか。『壮衰書』の上掲当該条について言えば、それらは『要集』では、㈠→

巻上337・342頁(上掲思想大系本頁数)、(二)→巻上338頁、(三)→巻上337頁、(四)→巻中353～357頁にみえるものである。ただし、例えば(二)136～138〈音声伎楽曲、緩急自然篪。歌舞詠頌謡、雅操任運鍾。精調嵐底琢、妙韻月前斫。簫笛琴箜篌、其音純宜宜。琵琶鐃銅捩、彼響悉奇々。玉笛金箏賦、瑶琴瑣瑟徽。〉、(三)141～142〈楼観構二瑪瑙一、殿閣作二琉璃一。遊二七宝宮殿一、住二千琪閣篆一。鳳甍連二瑤璐一、鴛瓦並二琮琦一。琨櫛流二金梁一、銀礎浮二玉楮一〉の如きは、正に、楽器一覧、宮殿擬えであって、勿論、原典にこれほどのものはない。これも前述した、例の、物尽くし的類聚の趣向に出るもので、それら文字のあやに表現価値をおくもの。こういう点にもまた、『壮衰書』の、類型的な慣用と熟知の成句を下敷きに文辞をあやどる遊戯性が窺われるのであった。

むすび

『壮衰書』は、紀長谷雄『貧女吟』を話型の骨子とし、その辞句と諷諭の方法を白詩に学び、『遊仙窟』を利用してあやを娯しみ、全体の様式を願文風に倣い、『往生要集』をも参照して、現世の壮衰・無常を語って阿弥陀浄土への救済を啓蒙的に教戒することを主題とした一書で、物尽くしや対句の修辞を巧む倭習味の強い漢文伝作品であって、その成立時期も、恐らくは、平安中期（十一世紀）以降のものであろう。(33)

以上、『壮衰書』について論じてきたが、最後に、小野小町との関係に触れておこう。『壮衰書』本来の享受は、慶本の享徳三年の書写奥書に「右志者捜二学高祖大師御製作之御楽意一、為レ令二未来朦昧之輩覚二悟壮衰転変之無常一、以二法華読誦之余暇一、拭二老眼一染二禿筆一者也」とあるような、仏教的理解がその著作意図にかなうものである。(34) その意味で、『壮衰書』は小野小町を描こうとしたものではなかった。既にして清輔『袋草紙』がこれを小町伝に参照する訳だが、(35) この初出時にあって、清輔は必ずしも両者を同定していないことに注意しておきたい。ただし、『壮衰書』がこの題号に「玉造小町」（玉造については未考）(36) の名を称したのは、既成の小町説話――恐らく片桐洋一前掲書が指摘する『小町集』増益の原基となったようなそれ――の背景を利用して、壮衰変転の無常を効果的に説得しようとする意図からであろう。とすれば、既成の小町観を利用した分だけ、その享受過程に於いて、成文化された一つの権威として、さらにそれがあたかも仏教的な教理に解釈し直されているかのようにみえるだけに、小町像の形成に急速に荷担することになるのは道理であった。「玉造小野小町(子)壮衰書」（彰本尾題・松本）、「玉造小野子壮衰書」（慶本）の写本の題号や、慶本書写跋（歌学系の立場から、本書を全くの「小野小町之行実也」とする）などが、『壮衰書』享受のその後のゆくえを如実に物語っている。

注

(1) 伝本によって題号に多少の相違があるが、承久元年古写本（下記）等も参考にし、「玉造小町子壮衰書」を正式名と認める。

(2) 「小野小町（以下割注）如二壮衰伝一者其姓玉造氏也。小野ハ若住所名歟。但或人云、件伝弘法大師所レ作云。小野ハ貞観之比人也。彼壮衰ハ他人歟」（小沢正夫他著『袋草紙注釈』上、218頁）

(3) 例えば、謡曲（卒都婆小町他）、絵画（小野小町壮衰絵巻＝鎌倉時代・ハ一九七四年、東京国立博物館特別展絵巻目録）、あるいは、狩谷棭斎『袋注倭名類聚抄』、伴直方『国字考』や『遊仙窟鈔』といった類の考証、注解等にも引用され、相当広範に読まれた。なお注4文献参照。

(4) 西下経一「伝説化されたる小野小町」（国語と国文学・S4・10）、前田善子『小野小町』、川口久雄『平安朝日本漢文学史の研究』、川尻悦

子『玉造小町壮衰書』と小町伝説」（文学論藻〈東洋大〉47）、浅見和彦「小町変貌」（成城国文9）、波戸岡旭「『玉造小町子壮衰書』の出典に就いて」（日本文学論究〈国学院大〉34）、片桐洋一『小野小町追跡』他があるが、前田、片桐のものが要領よくこの間の事情を整理している。

（5）今井源衛「漢文伝の世界」（『王朝文学の研究』所収）。

（6）『白氏文集』本文は四部叢刊本白氏長慶集に拠るが、紹興本をも参照し、旧鈔本のある巻については平岡武夫・今井清校訂『白氏文集』（京大人文科学研究所刊）、太田次男・小林芳規『神田本白氏文集の研究』を参看した。又、掲出詩文には花房英樹『白氏文集の批判的研究』の篇目番号を付す。

（7）旧鈔本には、「議婚」以下十首の各題は存在しなかったものの如くであるが（太田次男「本邦伝存『秦中吟』諸本の本文並びに訓読について」〈斯道文庫論集16〉）、今、便宜に四部叢刊本のそれを借りる。

（8）太田次男「白詩受容を繞る諸問題―文集古鈔本との関聯に於て―」（国語国文46ノ9）。

（9）（貧）本是富家鐘愛女――（壮）12吾是倡家之子良室之女焉。／（貧）幽深窓裏養成身、綺羅脂粉粧無暇――（壮）14～17被寵華帳之裏、不歩外戸。被愛珠簾之内、无行傍門。〜面不絶白粉、顔無断丹朱。／（貧）父母常言与貴人、公子王孫競相挑――（壮）56～59是以、君臣子孫、争婚姻於日夜。富貴主客、競伉儷於時辰。然而、耶嬢不許、兄弟无諾。唯有献王宮妃之譏、専无与凡家妻之語。／（貧）産業漸傾遊狐裘、家資徒竭酔歌前、十余年来父母亡、弟兄離散去他郷――（壮）59～60而間、十七歳而喪悲母、十九歳而殞慈父。廿一而亡兄、廿三而死弟。／（貧）日往月来家計尽、飢寒空送幾風霜――（壮）63～64富貴漸微、衣食数踈。家屋自壊、風霜暗隕。

（10）「あかね」〈共立女子短大国文研究会〉9

（11）『壮衰書』の60〈別鶴之声、叫漢天而聴幽。離鴻之音、喚胡地而愁切〉〜上掲66までの趣向は、既に平安初頭の詩（桑原宮作「伏枕吟」・凌雲集所収）にもみられるから、これは中国詩に於ける一種の類型的表現であろう。参考に「伏枕吟」を掲げる（本文は小島憲之『国風暗黒時代の文学中（中）』1808頁に拠る）。「池台漸毀、僮僕先離。客断三柳門一、群雀噪、書晶三蓮室一、晩蛍揚。月鑑レ帷兮影冷、風払レ簾兮声悲、聴三離鴻之暁咽一、視三別鶴之孤飛一。心倒絶兮悽三今日一、涙潸浛兮想三昔時一。栄枯但理矣、倚伏固須レ期（下略）」。なお、「榻燈桑三於階閫一兮、蟀蟋鳴三乎軒屏一。聴三離鴻之辰吟一兮、望三流火之余景一」（潘岳・秋興賦・文選巻十三）参照。

（12）高田信敬「楽府進講――紫式部日記注釈」（『源氏物語の探究』4）。

（13）太田次男「白氏諷諭詩考――平安時代の受容をめぐって―」（芸文研究27）。こうした中で、『源氏物語』は、『秦中吟』や『新楽府』等諷諭詩の利用に特異性をみせる訳だが（丸山キヨ子『源氏物語と白氏文集』）、閑適詩よりも諷諭詩を重視し、そこからの引用が顕著になってくる院政期乃至鎌倉以後の文集享受の動向を考慮すれば（太田次男「釈信救とその著作について――附・新楽府略意二種の翻印」〈斯道文庫論集5〉、斉藤慎一「太平記における白氏文集の摂取」〈言語と文芸・S35・1〉、神田秀夫「白氏文集の影響について」〈金沢文庫研究13の7〉等参照）、『壮衰書』の場合は、時期的にも、やがてこれに呼応するものと考えてよいであろう。

（14）底本は、蔵中進編『江戸初期無刊記本遊仙窟本文と索引』に拠るが、林望「遊仙窟本文校勘記」（『東横学園女子短期大学創立二十五周年記念論文集』所収）を参照して、古鈔本に従ったところがある。

（15）「蟹螯（カニハサミ）」は、真福寺本『遊仙窟』に「蟹大爪」として存する由である（林校勘記）。なお、白詩に「陸珍熊掌爛、海味蟹螯鹹」（文集巻五十四・2412・奉レ和三汴州令狐令公二十二韻）とある。

（16）『御定歴代賦彙』（清・康熙四十五年刊本影印・中文出版社刊）解説（吉川幸次郎）。

（17）ほかに、目加田さくを『枕草子論』、阪倉篤太郎「『物づくし』調べ」（女子大国文20）等参照。

（18）『香要抄』所引『遊仙窟』に「東王父之仙桂」とあるのは（天理図

書館善本叢書31）誤写であろう。

(19) 大曾根章介「平安時代における四六駢儷文—本朝文粋を中心にして—」（中央大学文学部紀要71）参照。

(20) 上掲〈笠間書院版〉補注。

(21) 加地哲定『増補中国仏教文学研究』参照。

(22) 川口久雄前掲書は延喜期（西暦九〇〇年始頭）の唱導僧を作者に想定するが、到底認められない。

(23) 小島憲之『国風暗黒時代の文学中(中)』1611頁。又、「箇々吟」（文集巻十二・0604）、「有感三首ノ第三」（文集巻五十一・2229）等参照。

(24) 鈴木修次「初唐詩における反復的表現の技巧について」（日本中国学会報14）、『唐詩　その伝達の場』（NHKブックス）。

(25) 『王沢不竭鈔』については、大曾根章介「本朝文粋の後代作品への影響（上）—主として平安後期の漢文学について—」（国語と国文学・S36・1）、「平安時代の駢儷文について—文章の段落と構成を中心に—」（白百合女子大学紀要3）に論究がある。今、内閣文庫蔵本に拠りながら、これらを参照する。

(26) 「釈名曰、九十曰二鮐背一、或曰二黄耇一、或曰二凍梨一」（芸文類聚・巻十八・人部二・老）、「鶴髪鮐背」（白氏六帖事類集巻十七・老二十五）。

(27) 宋玉・登徒子好色賦（文選巻十九）、丹波康頼撰『医心房』房内・悪女第二十三の項（『玉房秘決』引）等参照。

(28) 例えば、「白虎通云、天子墳高三仞、一仞七尺、樹之以松、諸侯半之、樹之以柏」（『弘決外典鈔』第九所引）。

(29) 日本思想大系6『源信』の当該経文掲出箇条（37頁頭注）は不審。

(30) 大野達之助『上代の浄土教』、速水侑『浄土信仰論』参照。

(31) 石田瑞麿上掲『源信』解説、藤井智海『往生要集の文化史的研究』、松村博司「栄花物語と往生要集」上・中・下（平安文学研究10～12）、岩瀬法雲「源氏物語と往生要集—源氏物語の精神—」（国語と国文学・S40・2）。

(32) 「銀ッ」（中田祝夫・林義雄『字鏡集　白河本・影印篇』417頁）。

(33) 臆断を恐れずに言えば、『貧女吟』の利用やその願文風の表現の類似からみて、本書は、それらを収載する明衡撰『本朝文粋』（康平年間1058～1064成立か）の影響下に成立したものと考えられようか。

(34) 藤原雅教の本書所持の次第も、出家入道（永万元年1165出家）のつれづれの賞翫の具であったかも知れない。

(35) 注(2)参照。

(36) 「玉造小町」を『小町集』所載の玉造江の歌（『私家集大成』中古Ⅰ・小町Ⅰ37）を詠んだ小町から派生したものと合理的に解釈する説（黒岩涙香『小野小町論』）や、小町の出身地を玉造に索める考え方（石原昭平「小野小町の説話」〈『日本の説話』2所収〉）等があるが、上述のような本書の性格を考え合わせると、「阿小町愛法」（『新猿楽記』）の如き淫靡な小町像の出現も窺えるので、あるいは、そうした多様な小町変相の時流に乗った、これも一つの洒落の線上に理解すべきものかも知れない。待考。

〈付記〉

小稿は、小島憲之氏宅に於ける研究会（読古会・S55・6・29）の拙い報告を礎に、これを大幅に改稿したもの。元来、それ以前の、ある文学大辞典に依頼された項目執筆に端を発するが、もっぱら平安前期の文学を対象としてきた私にとって、『壮衰書』を延喜期の成立とする通行の一説を批判・検証し直す必要にかられて考究したものである。研究会の方々から戴いた有益な御助言——ことに、新間一美氏からはわざわざ抜刷をお送り戴き、貴重な御教えを賜ったことに、感謝申しあげたい。尚、成稿に際しての文献調査に関し、彰考館、慶応義塾大学図書館、無窮会図書館、島原公民館（松平文庫）、国立公文書館（内閣文庫）、京都大学図書館、静嘉堂文庫、国会図書館各位の御厚意に、この場を借りて深謝申しあげる。